

ももっさんは誰が好きなの作家っていますか？と聞かれたらばっと名前が挙がるのがミエエ
ル・エンデと深沢七郎だ。聞かれることなんてないけど。このふたりは好きとかなんとか以前に
まったくほかとは違っている。「おれに聞くの？」のどこかで山下さんがブルースリーのことを
「親鳥」とあらわしていたけど、わたしから見たエンデはわりとそれに近い。エンデが子供の
ための（ための、というのなんかしっくりこないが）本を書いたとき、そこに出てくる浮浪
児の名前の音が「もも」だった時点でエンデの書いたものがたぶんわたしの親鳥だった。
『モモ』がリリースされた一九七三年にわたしは細胞分裂衣をはじめて、翌年に生まれた。
深沢七郎のほうはもっともって大人になってから新潮文庫の『樞山節考』をジャケ買い
して、読んで、びっくりした。小説の中で歌われる「樞山節」の手書きの楽譜が載っていて、
もうそれだけでどうしようもなく惹かれた。勝手なんだ。しかもこの人はギター弾きた。

深沢七郎の書くものは、たとえば『笛吹川』とかもそうなのだけど、人が死んだり生まれ
たりすることに余計な付箋やがついてない。「外側」からゲームのコマを動かしている者の

目線で書かれたものではない。動きそのものだ。深沢七郎の書くものの中に出てくる人間は
作者の都合で死んだり生まれたりしてるんじゃない、むしろその死んだり生まれたり動きが
書く深沢七郎をつくっている。だからそこには傍観者の思い入れや情のようなものが挟まれ
ない。挟まれようがない。この人の小説を読むのは旧約聖書を読むのと少し似ている。ぜん
ぜん別の常識で《生きてる》をやってる人々がそこについて、それらはつくり話にしてはめっちゃ
くちやすぎで、うまいこと片付いたりオチがついてしまったりもせず、なんかいろんなにおいがして、
でこぼこしていて、雑味がそのままだけど「圧」とか「念」とかが驚くほどない。あまり他で
味わったこと^のない軽さだった。圧はないけど、だからといってサラッと歯切れよく読みやすく流れ
ていくのでもなく、ある点に折りたたまれて含まれてるものが突然どばっ、とこぼれ出て
きたりして、深沢七郎はそれをおもしろがっていちいち拾いあげる。拾いあげたものに引っかけ
てぽーんと跳ぶ。がったんがったん跳ぶ。

そういえば文庫版の『樞山節考』には「解説」がついていて、それを書いた人は深沢七郎